

魔術的な味

澤内智子

3年ゼミのランボー講読、アイルランド?ギリシア旅行、2004年度4年ゼミ前半のアンゲロプロスやマン・レイ、リモージュ留学、パリ夕食ゼミ、2005年度4年ゼミ後半のシュヴァンクマイエル、ガウディやミロ、『スコープ少年の不思議な旅』とスコープ展、ペローとドゥミの『ろばの皮』、さまざまな映画、講演、展覧会、とんき本店、鎮海楼、そしてアニメーション映画会。軽井沢合宿、銀座お菓子ゼミぼろん、柿や枇杷、極上うなぎ……ああ、たくさんあります。

巖谷先生との3年間はあっという間だった。とてもおいしい3年間。口だけおいしいのではない。身体においしいのだ。新しいことを知るたびにわくわくする。たえず私たちにさまざまな「味」を教えてください。ゼミは毎回、不思議な味に出会う場だった。魔術的な味だ。ちょっとスパイスを効かせるだけで、まったく違うものに化けることもある。

私は味覚の鈍ったいわゆる現代人になりたくない。魔術的な味が人生を左右するということを信じている。

2004年度前期の4年ゼミでは、先生の監修によって日本各地でひらかれたマン・レイ展のカタログをもとに、マン・レイとは誰か、現代芸術とは何かを探りつづけた。そのうえで環境のいい岡崎の美術館へ出かけ、マン・レイの作品に出会えたときの感動は忘れられない。写真でしか見たことのなかったオブジェたちが、目の前に立体としてあった。

フランスのほうき(balai)のバレエ(ballet)はいちばん好きな作品だ。シンプルでくたなくて、一瞬で笑いをさそうオブジェ。ただそれだけ。美術館のなかに、ひとつの立派な作品として、まじめそうに展示されている姿がなんともおもしろい。

リモージュへ行く前に、一緒に留学した諸田さんと、パリのモンパルナス墓地にあるマン・レイ

のお墓を訪ねたら、花だけではなくたくさんのフィルムケースが上に置かれていた。置かれたフィルムケースもあわせて墓碑のようだった。世界中のファンからの、なんとも素敵な贈り物オブジェだと思った。

2005年度後半のシュヴァンクマイエル展では、へんてこなオブジェや人形、コラージュや絵や映像があちこちに「居た」。どの作品にも生と動を感じた。静止しているはずなのに、パチンと指を鳴らせばいまにも動き出しそうな物たちにあふれていた。だがもしほんとに動きだしたら、と考えるとぞっとするような作品が多い。だから見ているとよけいにドキドキしてしまう。

ゼミの一環としてひらかれたアニメーション映画会も、ほんとに貴重な体験だった。映画史上の素敵な作品を一日中、しかも真っ暗ななかで、フィルム上映で観られる機会なんてめったにない。実験的なもの、個性的なもの、ギャグ満載のものや心にしみるものなど、ジャンルも手法もさまざまで、アニメーション映画の幅広さと可能性を感じとれた。命を吹きこんで動かすこと、アニメ(animer)することへの興味がいよいよ高まった。

年末の桑原弘明スコープ展の不思議な展示室も忘れられない。画廊のカーテンで仕切られた奥の薄暗い部屋に、ぽつんぽつんと配置されたスコープたち。そのひとつを覗きこむと、小さな空間のなかに大きな世界が見える。しかもいくつかの時間を体験することのできる不思議な装置、スコープ。覗き見という人間の欲望のひとつをみたまながら、奥へ奥へとひろがる世界にドキドキする。あの瞬間が心地よい。展覧会がおわれば、もう当分は覗くことができないだろう。そう思うとさびしくもある。そしてあの日の体験は、現実にあったことなのに、幻のように思えてくる。その感覚がほんとうに不思議だ。

私はおそらく3月に卒業するが、ゼミはおわらない。先生とその仲間、先輩後輩、そして大学外の人々までも、自然につながってゆくのがこのゼミだ。卒業してもゼミの部屋へ行きたい。目黒のとんき本店にも鎮海楼にも、できれば行って夕食に加わりたい。ほんとうに先生との3年

間に、おいしいものをたくさん教わった。食べ物にかぎらず、見るもの読むものについてもだ。
卒業してからも可能なかぎり、ゼミや講演や展覧会に参加させていただきたく思う。